

する必要があるように思う。彼らの意思をどのように汲み取るのか、主張や政策をどう評価するのか、さらには世界史の中に彼らをどう位置づけるのか。時期尚早のようにも思うが、こうした同時代的な考察が中東の今後を図るためには重要な点になるのだと感じる。

(佐藤 麻理絵 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教)

---

## 長沢栄治『近代エジプト家族の社会史』東京大学出版会 2019年 xiii+517+41頁

本書は、著者の長年の研究のうち、家族に関連する研究をまとめた集大成である。アラブ世界において、家族への関心は依然として高く、最近でもスアド・ジョセフが編者を務めたアラブ世界各国別の研究動向をまとめた評論集が刊行されている。同書の序文では、アラビア語では様々な家族を指す用語がある一方で、familyに集約する西洋的な理解ではアラブ社会の家族の動態性や歴史的な複雑さを捉えきれないと指摘し、家族を地域ごとの社会的文脈の中から理解する試みを提唱している [Joseph ed. 2018: 3]。本書も同様に家族をエジプト社会史の文脈からみる試みであり、指標となる多くの研究が再録されている。

全体は、2部構成となり、10章とコラム11本からなる。著者が過去に発表した論文を中心に構成されているが、2章とコラム3のみ書き下ろしである。既発表論文については、本書への収録に際し、原則として加筆されていないが、1章のみ現在までの情報が補注という形で加えられている。また、各章の前には、解説が入り、その章が書かれた背景や著者のエジプト滞在時での印象が述べられている。

章とコラムの構成、及び初出掲載誌と刊行年は、以下の通りである (pp. 514-515)。1986年のコラム1が最も古いが、章では、1987年の1章から、2章の書き下ろしまで、30年以上の間に書かれた原稿が収められている。

### I 家族の概念と家族関係

#### 第1章 エジプトにおける家族関係の近代化 (『現代の中東』1987年)

《コラム・1》アサビーヤ概念をめぐって (『アジ研ニュース』1986年)

《コラム・2》エジプト——「家の名」をめぐって (『第三世界の姓名』1994年)

#### 第2章 近代エジプトの家族概念をめぐる一考察 (書き下ろし)

《コラム・3》『高野版現代アラビア語辞書』における家族表現 (書き下ろし)

### II 家族の社会史の諸相

#### 第3章 近代エジプトの村長職をめぐる権力関係 (『中東における国家と権力構造』1994年)

《コラム・4》革命後エジプトの選挙をめぐる風景 (『Asahi 中東マガジン』2012年)

《コラム・5》アメリカとナセルの国家 (『Asahi 中東マガジン』2012年)

#### 第4章 都市化と社会的連帯——上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会との事例比較 (『中東の民衆と社会意識』1991年)

《コラム・6》イスラーム世界の広がりとは法秩序——加藤報告に寄せて (『歴史創造の事理と法理』1998年)

《コラム・7》「洪水の後」のアレキサンドリア (『Asahi 中東マガジン』2014年)

#### 第5章 アタバの娘事件を読む——現代エジプト社会における性の象徴性 (『地域研究論集』2000年)

《コラム・8》ムハッガバート現象 (『「きもの」と「くらし」』1993年)

《コラム・9》革命とセクハラ——エジプト映画「678」をめぐって (『地域研究』2013年)

#### 第6章 現代エジプトの社会問題とNGO (『イスラーム世界』2000年)

#### 第7章 イスラーム運動とエジプト農村 (『エジプトの原理主義運動』1996年)

《コラム・10》現代メディアとイスラーム (『アジアを知れば世界が見える』2001年)

#### 第8章 世界綿業の展開とエジプト農村の労働力問題 (『世界の構造化』1991年)

第9章 エジプト綿花経済における「不自由な賃労働」——イブバ型労働制度をめぐる（『歴史学研究』1992年）

『コラム・11』 エジプト農民運動の聖地を訪ねて（『Asahi 中東マガジン』2012年）

第10章 少年が見たエジプト1919年革命（『植民地体験』1999年）

以上、著者の長きにわたる広範な問題意識により、様々な課題が論じられてきたが、家族はその背景として著者の問題関心の中に存在してきたとされる。書評にあたり、本書全体を範囲として紹介するのは、紙幅の都合上、難しい。1章が著者の家族に対する関心の根幹にあるとすれば、2章は、その解説にあるように、1章に対して、「その一部に回答する」（p.42）ことを目的として書かれた書き下ろしである。そして、以降の章が第2部として「家族の社会史の諸相」を扱っている既発表論文だとすると、2章は、橋渡しの役割を果たすために書き下ろされたとも考えられる。そのため、書評では、2章を軸に紹介し、他の章は2章との関連で整理した方が、様々な媒体で出された各論文を通底する主張が「近代エジプト家族の社会史」としてより明確になると考えられる。以下では、2章についての紹介と他の章との結びつきを整理していく。

2章は、下記の5節からなり、120ページほどになる。

- 一 エジプト農村の家族（アーイラ）「論争」（pp.43-56）
- 二 近代エジプト自伝資料における家族概念（pp.56-84）
- 三 ナギーブ・マハフーズ『カイロ三部作』における家族概念と家族関係（pp.85-108）
- 四 社会学者サイド・オウエイス自伝における家族概念と家族関係（pp.108-128）
- 五 むすびに——地域研究としての家族研究（pp.128-160）

2章の冒頭ではエジプトで家族を指す用語について、解説がある。アーイラは、普遍的な家族を表すと共に、拡大家族または父系出自集団を指す言葉としても使われる、とされる。また、ウスラは、普遍的な家族を表すが、核家族や世帯を表す言葉としても使われる。それ以外にもいくつか家族を指す言葉は存在するが、この2つが本書で展開される家族概念にとって重要となる。

第1節は、日本におけるエジプト家族に関する研究を2つに分けて整理している。なお、第1節と第2節については、著者の引用に対し、可能な限り原文を参照しまとめ直した。著者によると、70年代に中岡三益と木村喜博による大塚久雄の「共同体論」を議論の出発点としたエジプト農業共同体論の中で、アーイラが土地の共同占取の主体として議論されたのが、日本における近代エジプト家族の研究の始まりとされる。アーイラとされる家族は、農業共同体として、土地と密接に関わっており、土地を中心とした財産相続についても大きな役割を果たしていた。

この共同体論アプローチに対する批判が、80年代に加藤博により展開される。アーイラを血縁共同体とし、農地の共同耕作の主体とすると、血縁関係にない者たちが加わる実態にそぐわなくなるため、代わりに、世帯あるいは個人を単位として農村を分析する必要性を論じた[加藤 1983: 220]。そして、加藤はアーイラを社会制度の観点から分析する制度論アプローチを提起した。著者は、エジプトで加藤が岩崎えり奈と共に中央動員統計局（CAPMAS: Central Agency for Public Mobilization and Statistics）との合同調査を長年行い、その集大成として出された英語共著（*Rashda*）を基に、「論争」の紹介を行っている。*Rashda* の中では、アーイラを「社会経済的利害の結びつきにおける個人の行動の結果」として分析し得るとし、アーイラの代わりにウスラを居住と家計を共にする分析単位として定義した[Kato and Iwasaki 2016: 47-48]。

著者は、中岡＝木村と加藤＝岩崎の両者の研究とも、アーイラが農村社会に普遍的に存在する、とした点で共通点を持っていると指摘する。また、後者においては、*Rashda* で見られるように、世帯間での協業関係の方がアーイラよりも強調されており、社会制度としてのアーイラの存在感は薄く感じられると述べている。著者は、アーイラが「個人が相互行為のなかから作り出す制度」（p.50）という分析に耐えられる概念かどうか、またウスラとアーイラは近代以降に他者により押しつけられた家族概念ではなかったか、と問題提起を行っている。この問題提起は、第2節で人類学者タラール・アサドの議論を紹介する形で補強される。

第1節が農村社会を中心としたアーイラの研究史であったのに対して、著者は、1章において、70年代以降の都市を中心とした国家における近代家族のあり方を描いている。近代以降、家族は国家との関係で論じられてきており、ウスラとアーイラをどう考えるかといった視点は、法制度の改革や政策などと切り離しては考えられない。第2節で紹介されるアサドの議論では、法整備の過程で国家が家族に介入するようになったとあるが、その実態が明確になったのが1章の焦点になる70年代以降である。

第2節で、著者は、アサドの『世俗の形成』を引用し、「家族」の私的領域への位置づけが、19世紀末からのムハンマド・アブドゥによる法改革を通して、アーイラと呼ばれる近代家族の形成として現れた、という議論を紹介した。アブドゥの指す近代家族とは、単婚の核家族を指し、この時代の新しいものとして、彼のシャリーア裁判所に関わる法改革の焦点となった。著者がアサドによって、注目する点は、シャリーアが国家の法規範の下位区分に変質させられ、その法的範疇に「家族」がなることで、「家族」が行政の介入の対象、すなわち近代国民国家運営の一部になったことである。一方で、著者は、アーイラという言葉に付与された近代性については、十分な考察が深められていない点を指摘している。

この議論を踏まえ、第2節の後半では、エジプト近代における家族概念の問題を、自伝資料を用いて考察している。自伝資料の中には、アサドが挙げたアブドゥも含めて7人の同時代の自伝が挙げられている。それぞれの考察では、家族をどのような言葉で表現し、家族概念がいかに使われているかを検証している。

アブドゥ(1849-1905)の自伝では、アサドが近代家族の用法としたアーイラを使用していなく、代わりにバイトが用いられている点が明らかになる。アサドが依拠した資料の時期と自伝が描いた時期が重ならないため、言葉の使用になぜ違いが現れるか不明ながら、興味深い事実が提示されている。また、アブドゥと同時代でも、アハマド・オラービー(1841-1911)はアーイラの語を自伝で使用しており、バイトは家屋としての意味しか持っていない、という違いには、家族を表す語の多様性が示されているように思われる。アリー・ムバーラク(1823-1893)も同様にアーイラを使用しているが、自身の家族も含めたより狭い親族にはアハルを使っている。

続く時代において、アハマド・アミン(1886-1954)は、アーイラを使用せず、ウスラとバイトをほぼ同じ意味で使っている。一方、ホダー・シャアラーウィー(1879-1949)とサラマ・ムサー(1887-1958)は、現代的用法とほぼ同じくアーイラとウスラを使っている。ターハ・フサイン(1889-1973)は、ウスラを主に、アハルを補完的に使っている。

第3節では、エジプト人ノーベル賞作家ナギーブ・マハフーズ(1911-2006)の長編小説『カイロ三部作』を分析に使っている。正則アラビア語で書かれているが、小説には「アラビア語口語(カイロ方言)の世界が隠れている」(p.90)のが、自伝とは異なる角度からの検証の狙いであると思われる。小説の舞台となる時期は、1917年~1944年であり、第2節の自伝で取り上げられた後半4人の時期とも重なる。大半の評価において、『カイロ三部作』は、この時代を表す代表的な文学作品であり、家族関係についても深い洞察を伴って描かれているとされる。ただし、著者は、小説として登場人物を中心とした家族関係は整理されているが、親族などへの広がりには限定されている、と説明している。

著者は、この小説で、ウスラ、バイト、アハル、アールの4つの家族を表す語が登場する一方、アーイラが使われていない点に注目している。第2節でアブドゥによりアーイラが新しいものとして挙げられているが、この状況を裏付けているとも考えられる。4つの言葉のうち、ウスラとバイトが主に使われている。そして、著者は、小説中に、家族を表す言葉がいかに使われているかを7つの用例に分けて分類し、その用例にウスラ、バイト、アハル、アールのどれが当てはまるかを詳述している。

次に、著者は、家長である父親を中心に家族成員間の関係がどのように成り立っているかを小説の描写から説明する。家父長制に基づく父親の権威は、主に女性成員に対するセクシュアリティの管理に代表されていると共に、家族の身体的安全を目的としたセキュリティについての責任意識に基づく。この話題は、第5節でも引き継がれている。また、父親とは別に家族成員の交流の場となる「コーヒーの座」など母親を中心とした人間関係についても言及されている。小説では父親と母親のそれぞれと関わりのある人間関係が家族内に形成されるだけでなく、これらの関係は、やがて時代の変遷とともに変化する可能性が示されている。

第4節は、第3節の小説と同時代である社会学者サイイド・オウエイ(1913-1989)の自伝を資料としている。マハフーズとオウエイは、共に1919年革命を経験した世代である。『カイロ三部作』でもその体験

が活かされているが、オウエイイスについては、10章で彼と家族が1919年革命という時代の転換点とどのように向き合ったのかが取り上げられている。第4節で彼の家族の概要が解ると、より理解も深まるだろう。オウエイイス家は、祖父、祖父の異父弟である「大叔父」、父、オジの4人の男たちとその妻、子どもを中心とした大家族を構成しており、親族成員が登場しないマハフーズのアブドルガワード家と異なる。祖父が一家の家父長であり、他の成員は彼の権威に服している。

オウエイイス自伝での家族表現で頻繁に使われるのは、ウスラである。他に、アハル、アーイラ、バイト、アシーラ、アールが使われている。アーイラは、ウスラと互換的に使われる場合があるが、家系あるいは一族、名家といった特定の使われ方がある。家長の語においては、祖父に対してアーイラが使われるのに対し、父を想定してウスラが使われる用例が紹介される。

オウエイイス家の特徴は、父系に限定されない親族的な関係の広がりにあるといえるだろう。著者は、オウエイイスのいう「拡大家族」について、同じ家に暮らしていない親族も含まれるとして、オウエイイス家でムハラム月にザカートとして布地を配る家族成員の範囲に注目している。姻戚も含めた広い範囲の者たちへの布地の配布から、アーイラが持つ「扶養」の意味が示されるとともに、この配布が家父長である祖父の指示によってなされ、実行は長男であるオウエイイスの父の役割であったと整理される。祖父を家父長とするアーイラの下に、オウエイイスの父のようなウスラの長がいる構造が示される。

オウエイイス家では、曾祖母の薬種問屋を基盤に事業を受け継ぎ拡大させた祖父が、彼の息子(オウエイイスの父)と異父弟にも店を持たせ独立経営をさせる形で事業を行っており、一家がまとまって商売をしているわけではないが、祖父の影響力の強さがうかがえる。ところが、オウエイイスの父の死を契機にアーイラの崩壊が始まり、祖父の死によって決定的な分裂を迎える。アーイラは、単にお互いの血縁関係があれば構築されるわけではなく、成員をまとめる家長の存在が不可欠である、と自伝を通して理解できるのである。

第5節は、通常の「むすび」に比べると長いが、2章が単独で存在するのではなく、1章に対する回答のまとめであるのと同時に、以降に続く章を結びつけるための解説も兼ねているからであると考えられる。そのため、幅広い話題が展開されている。

まず、第2節と第4節で扱われた自伝資料は、個々人の体験が彼らの知的人格の形成にどのような影響を与え、また思想形成に反映されるかが解るために使用したと述べられる。オウエイイスについて、彼の思想形成と家族との関わりが語られ、著者は、1章の最後で引用したオウエイイスの発言に触れる。

オウエイイスの夫と妻とその子どもからなる家族が古代エジプトの壁画にも描かれていたイスラーム化以前にもあった家族の姿であるとの発言は、第2節でアサドが述べた「近代家族」とは異なる家族のあり方であった。近代以前にも夫婦間の愛情はあったとアサドも考えるが[アサド2006: 301]、彼は、近代国家が夫婦間の愛情を核にした家族を「近代家族」として統制の対象にした、と主張している。オウエイイスの自伝には、父と母の関係と彼に対する彼らの愛情から得た体験が書かれている。この自伝資料から、著者は、統制の対象となる「近代家族」とは異なる、「エジプト人民衆の思想や宗教に根を張ったひとつの「近代」のかたち」(p.132)としての変わらない核家族的な存在をオウエイイスが主張したと考えられると述べ、1章での記述を振り返るのである。

続いて、著者は、地域研究に関し、他の地域で行われている地域研究とみなせる研究の参照によって、地域を越えた「広い意味での地域研究」(p.134)を標榜する。家族を対象にした他の地域の研究から、自身が研究する地域を捉え直す様々な示唆が得られるとする。その示唆から、「権力関係としての家族の形成」(p.138)に焦点が絞られ、家父長制が取り上げられる。著者は、家父長制の特徴として、家族成員相互が家族として関係を結ぶにあたり、お互いの性や年齢などの差異を根拠とした差別と抑圧の存在を挙げている。人間がこの不平等な関係を自ら選択した理由を考えるにあたり、著者は、「人間の生の保障」(p.140)という視点から、家父長制の多様性と「人間の生の保障」の意味の広がりについて中東地域研究の視点から議論を進める。

著者は、近代西洋で発生した「近代家族」のグローバルな普及に基づき、普遍的な家父長制のあり方が存在するという硬直的な議論を批判した。エジプト国内でも家父長制を支えるイデオロギーには地域差が存在する現状に目を向け、家族について考えるにあたり「家族はどこよりもまず人々のこころのなかにある」(p.142)という結論に著者は至る。個々の家族にまで情緒的な違いがあるとするとする一方で、近代資本主義の発展

における近代国家の存在が家族のかたちに大きな影響を与えたと論じる。

家族と国家の関係は、8章と9章において世界資本主義の中で19世紀のエジプト綿花経済と家族がどのような状況に置かれていたかが論じられているが、第5節では、19世紀末以降を念頭に2つの関係に宗教を加え、三者の関係から近代における家族のあり方を考察している。さらに、著者は、国家による「シャリーアの変容」を伴うイスラームの管理を「体制イスラーム」と呼び、これに対し「(真正の)シャリーアの適用」を求めるイスラーム主義運動が興ったとする。両者は、前者が「近代家族」を、後者が「伝統家族」を掲げ、家父長制のあり方をめぐり対立しているといった説明がされる。なお、7章では、農村におけるイスラーム運動と伝統的な家族が支配する村落政治との関係が、国家と宗教の問題の枠組みで論じられる。農村における三者関係のあり方として、興味深い事例が展開される。

「人間の生の保障」の意味の広がりに関し、著者は、まず家族が持つべき尊厳について、そして成員同士が行う扶養とケアの重要性を指摘する。そのうえで、以降に展開する章と絡めて、第3節でも触れたセキュリティとセクシュアリティの問題を論じる。暴力は、セキュリティとしての「生の保障」との関わりで注目された。近代国家は暴力の独占と行使を正当化し、「近代家族」からその権限を奪ったが、「伝統家族」は、4章での血の復讐慣行に見られるように暴力を管理し、成員保護のために暴力を行使してきた。4章でみられる港湾労働者社会では、農村から都市への労働者に就業機会や生活の保障をするなど、血讐集団として機能する以外にも疑似家族的な側面が見られたとある。なお、3章で論じられる村長(オムダ)職は、農村において、近代国家の行政制度の末端でありながら、「伝統家族」の長が就く場合があり、両者を仲介する役割を担っており、両者間の権力関係を示している。

著者は、復讐慣行にみられる名誉の問題と、5章の女性に対する暴力事件で焦点となる女性の尊厳について、名誉は人と人の中で成り立ち、社会的に共有されるものであるのに対し、尊厳は個人に帰属するものであり、名誉によって護られるべきものである、と整理する。名誉と尊厳は、「生の保障」にとって重要な役割を果たす、と述べられている。暴力は、名誉を護り、主に女性のセクシュアリティを管理し、秩序を維持するために家族の中で男性によってふるわれてきた。男性による暴力と女性に対する抑圧的な関係が、家父長制の特徴とされる。暴力は、近代国家によって家族から奪われたはずであるが、家父長制の形で存続したのだと考えられる。

最後に、著者は、2章で提示してきたエジプトにおける家族を表す言葉の多様性の背景にあるものは、「生の保障」の広がりにあるとまとめる。家族には、扶養とケアを含む成員保護としてのセキュリティと、名誉と尊厳を護るためのセクシュアリティの管理が、家父長制のような抑圧的な関係を伴うが、存在するのである。著者は、6章でのストリートチルドレンの問題を引いて、急速な社会変容に伴う家族関係の危機に際して、個々人の尊厳を護る「生の保障」から、新しい家族のかたちを考える視点が出されるとも述べる。そして、家族は柔軟に形成されるものであり、その過程で個々人の尊厳をいかに護っていくかのイデオロギ的な争いは続いてゆくだろう、と結んでいる。

以上が2章のまとめであるが、1章で提示された「アーイラの問題」と「ウスラ的問題」(pp.9-10)という区分と対照させると、「生の保障」は前者に相当し、後者は国家に属する領域となると考えられるだろう。エジプトにおいて、家族は、この2つの問題のせめぎあいによって成り立っていると理解できる。ただし、アーイラを拡大家族、ウスラを核家族と単に理解してしまうと、第2節で触れたように、アブドゥが単婚の核家族である近代家族をアーイラと表現した事例と齟齬が出てしまう。コラム3も参考にすると、彼は、アーイラが持つ「扶養」の意味に着目して、扶養対象となる家族の範囲を再定義しようと試みたのではないだろうか。その意味で、アーイラの語を使用しているが、アブドゥの試みは、「ウスラ的問題」に分類できるのである。

「ウスラ的問題」の中には、70年代以降の石油ブームに関わる国外労働移動の問題が挙げられている。本書に収録されていないが、著者には湾岸諸国への労働移動を扱った論考が存在するので、合わせて参照すると、エジプト家族に関する理解が深まるだろう。国外への労働移動が注目されるのは、家長である男性による単身出稼ぎにより、残された妻が家計に関する裁量権を持つなど家長の代わりを務めるようになり、特に農村では女性の社会参加が促進されたからである[長沢1986:122]。家長を頂点とする家父長制のあり方は「生の保障」とも関わるが、家長が不在の中でセキュリティとセクシュアリティをいかに護るかは、焦点と

なる。6章では、ストリートチルドレンの問題を産油国出稼ぎによる親の不在とからめて話題としている。また、8章と9章での国内での挙家型移動と比べると、海外への労働移動は、家族にとっても転換点になったと考えられる。

2章では、自伝や文学作品が考察の材料として使用された。他にも本書では、章やコラムで新聞の風刺画がエジプトの世相を解りやすく提示するために用いられている。自伝や文学作品を丹念に読み込み考察材料にするのも、新聞から意図にあった風刺画を見つけるのも、とても労力のいる作業である。また、3章では、第3節で前の節とは異なった材料として大衆演劇におけるオムダ像が紹介される。著者は、3章の解説で触れているように、法や政治制度、歴史資料などを参照するだけでなく、これらの資料を民衆の思想的遺産として位置づけ、地域研究への活用を試みてきた。過去の民衆が何を考え、生活していたかを知る術は限られており、幅広い文字資料から民衆の思想を再構成する手法は、人類学などが現地調査で住民の実生活に触れるのと異なる方法であり、本書の価値を高めている。

なお、本書ではサイド・オウエイスの自伝資料や彼の著作が紹介されているが、著者は、現在オウエイス自伝の翻訳の完成を目指しているという(p.456)。エジプトの宗教指導者や文学については翻訳されている著作がいくつかあるが、オウエイスのような現地の知識人の著作は、未だ十分に翻訳されていない現状がある。20世紀初頭を生きた知識人がどのように暮らし、何を考えたかを知り得る機会は、貴重となる。著者は、これまで多くのエジプト人知識人の著作の紹介を積極的に行ってきた。オウエイス自伝についても一部が既に著者により翻訳されているだけに、その完成が待たれるのである。

近年におけるエジプト家族の研究は夫婦関係に焦点を絞って行われるものが増える一方で、アーイラに関する議論は、世帯に限定されない家族として、拡大家族または父系親族集団といった理解のままにされてきたように思われる。本書にて、著者は、2章で家族に関する語彙の整理を通して家族概念を見直し、血縁関係に固定されない「生の保障」からアーイラを含めた家族を考える視点にたどり着いた。

だが、著者は、この視点の具体的な検証には慎重な姿勢を取り、代わりに、第2部での自身の長年にわたる研究の蓄積から、エジプト家族がいかに近代社会で様々な場面と関わってきたかの諸相から答えをくみ取ってもらう方法をとっている。「生の保障」を基点にした家族把握の有効性は、恐らく今後のエジプト研究に託された課題となるだろう。家族は、エジプトにおいて今なお重要な位置を占めており、現代社会における人間関係や連帯、社会規範を考える上で欠かせない視点となっている。本書は、エジプトやさらにはアラブ世界の家族研究の指針となり、家族概念に新たな光を当てる好著であると考えられる。

#### <参考文献>

- アサド, タラル 2006 『世俗の形成——キリスト教、イスラム、近代』(中村圭志訳) みすず書房。  
 加藤博 1983 「近代エジプト農村社会研究のためのノート」『東洋文化』63, pp.211-236。  
 長沢栄治 1986 「エジプトの農業労働力と労働移動」鈴木弘明(編)『エジプト経済と労働移動』アジア経済研究所, pp.93-149。  
 Joseph, Suad, ed. 2018. *Arab Family Studies: Critical Reviews*. Syracuse, NY: Syracuse University Press.  
 Kato, Hiroshi, and Erina Iwasaki. 2016. *Rashda: The Birth and Growth of Egyptian Oasis Village*. Leiden: Brill.

(岡戸 真幸 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員、  
 上智大学イスラーム研究センター研究員)

---

**Christine Crudo Blackburn and Paul E. Lenze Jr. 2019. *Syrian Forced Migration and Public Health in the European Union*. Lanham: Lexington Books, viii+109 pp.**

2011年以降、シリア難民問題は解決すべき喫緊の課題として国際社会の関心を集めてきた。シリア難民の世界各地への離散は、現行の難民支援制度の欠陥や難民受入をめぐる各国間の溝を浮き彫りにした。難民